

フリージア：その故地と移住に関する諸問題：中世初期アングロ・サクソン諸王国の民俗的背景(5)

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

279

(終了ページ / End Page)

299

(発行年 / Year)

2008-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007317>

フリージアン:その故地と移住に関する諸問題

—中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景(5)—

法政大学キャリアデザイン学部教授 岩谷道夫

1.

西暦5世紀半ば以降、ブリテン島に渡り、アングロ・サクソン諸王国を作ったのは、一般的に、ゲルマン人のアングル、サクソン、そしてジュートの三つの部族であったとされている。それは、8世紀のベータによる『英国民教会史』の中の、イングランド諸国を形成したゲルマン人部族についての、ある記述に基づいている。その三つの部族は、アングロ・サクソン七王国を建国し、ジュート、アングル、サクソンの順に盛時を迎えたが、やがて、デーン人の襲来とともに、七王国のほとんどが滅亡する。唯一存続し続けたウェセックス王国が、デーン人を抑えてイングランドを統一し、そこに統一国家としてのイングランドの歴史が始まることになる。三つのゲルマン人部族のうち、アングルとサクソンは、ウェセックス王国による統一後、アングロ・サクソンと総称されるようになり、一方、アングロ・サクソン七王国の中で最も初期に繁栄したケント王国のジュートは、その後衰退したが、ジュートをゴートととらえる伝説の中で、イングランドを形成した有力ゲルマン人部族の一つとして伝承され続ける。その結果、イングランドを作ったゲルマン人は、ベータの記述のように、アングル、サクソン、ジュートの三つの部族であったということになったのである。

ところで、ベータ以前、6世紀のプロコピオスは、ブリテン島の有力な構成民族の一つとして、フリージアンを挙げていた。そのフリージアンとは、西暦2世紀のタキトゥスやプトレマイオスにも言及がある、北海沿岸のゲルマン人

部族であった。また、そのフリージアンは、古期英語の『ウィードシース』、そして『ベーオウルフ』にも登場し、有力なゲルマン人として記述されている。それでは、8世紀のベータによる、イングランドの起源的ゲルマン人諸部族の記述の中で言及されていないフリージアンが、6世紀のプロコピオスにおいて、ブリテン島を構成する有力な民族の一つとして記述されているのは、どのような意味を持つのであろうか。フリージアンは、実際に、プロコピオスの記述にあるように、ブリテン島に移住し、居住していたのであろうか。本稿では、フリージアンの故地と、そのブリテン島への移住の事実の有無について、ベータの記述とプロコピオスの記述を中心に、これまでの研究者の諸見解を吟味しながら考えてみたいと思う。

2.

前述のように、ゲルマン人諸部族のブリテン島への移住については、8世紀のベータの『英国民教会史』の中のある記述が、歴史的事実を表わすものとされてきた。そのベータの記述は、次のようなものである⁽¹⁾。

さて、彼らはゲルマニアの有力な三つの部族、即ちサクソン、アングル、ジュートの地より来たのであった。ケントの人々（カントウワーリー）、およびワイト島の人々（ウイクトゥアリー）、即ち、ワイト島を保持している人々と、ワイト島の対岸にあって、今日までウェスト・サクソンの地でジュートと呼ばれている人々は、ジュート起源である。サクソン、即ち現在、古サクソンと呼ばれている人々の地域からは、イースト・サクソン、サウス・サクソン、ウェスト・サクソンの人々が来ている。アングル、即ち、アングelnと呼ばれ、ジュートとサクソンの間にあって、その頃から今日に至るまで、ほとんど無人の状態のままと言われている地域からは、イースト・アングリア、内陸のアングル、マーシア、そしてすべてのノーサンブリアの人々が、即ち、ハンバー川の北に住んでいる人々と、その他のアングルが来ている。

上のベータの記述では、大陸からブリテン島に移住したゲルマン人諸部族は、アングル、サクソン、ジユートとされており、フリージアンの名称は見出されない。また、アルフレッド大王が始めた『アングロ・サクソン年代記』にも、ベータの記述をもとに、その三つのゲルマン人部族が、イングランド諸国を作ったとする記述が見出されるが、やはりそこでも、フリージアンについては触れられていない⁽²⁾。

一方、前述のように、ベータより2世紀前の、6世紀の東ローマ帝国のギリシア人プロコピオスは、ブリテン島の有力な構成民族として、アングル、ブリトン、そしてフリージアンを挙げている⁽³⁾。アングルとは、ゲルマン人のアングルであるが、ブリトンは、ブリテンの語源ともなったケルト人で、ケルト人の中の、特にウェールズ人であると考えられる。その三つの民族のうちの最後のフリージアンが、本稿と関係する、古くから北海沿岸に居住し、2世紀のタキトゥスやプトレマイオスにも言及されているゲルマン人である。

まず、フリージアンの、タキトゥスおよびプトレマイオスにおける言及部分を確認したい。タキトゥスは、フリージアンについて、次のように記述していた⁽⁴⁾。即ち、フリースイイー（フリージアン）は、その居住地域が、アングリワリイー、カマーウィーの近隣で、大・小の二つのフリースイイーに分かれ、いずれもレーヌス川（ライン川）を境界として大海（北海）まで続き、またその居住地域は、いくつかの広大な湖（今日のゾイデル海）の周囲まで広がっていた、と。タキトゥスは、フリージアンについて特筆してはいないが、北方の大海（北海）に最も近く居住するゲルマン人としての認識は、強く持っていたようである。

またプトレマイオスの記述は、次のようになっている⁽⁵⁾。即ち、海に面した居住地域のゲルマン人として、西から、アミシオス川（エムス川）までの地域がフリースイイー（フリージアン）、ウィスルギス川（ヴェーザー川）までの地域が小カウキー、アルビス川（エルベ川）までの地域が大カウキーである、と。さらにプトレマイオスには、その東のキンブリア半島（ユトランド半島）の付け根にはサクソーネース（大陸のサクソン、ザクセン）が居住していると述べている。つまり、北海沿岸の西から東にかけてユトランド半島南端までの地域に、フリージアン、カウキー、サクソンが居住しているとしているのであ

る。そのプトレマイオスの北海沿岸のゲルマン人、とりわけ大陸のサクソンについての言及は大変重要であるが⁽⁶⁾、フリージアンについてのプトレマイオスの言及は、ほぼタキトゥスの記述と重なるものであろう。

結局、フリージアンは、タキトゥス、プトレマイオスに見出される、古くからのゲルマン人部族で、タキトゥスの頃から、ある程度の変化はあるが、その居住地域の中心的な部分は、変化していない。それは、大陸の北海沿岸の西方地域で、その中心部分は、現在のオランダのフリースランドとほぼ重なっている。その後数世紀間、フリージアンは、ローマの記述史料には、ほとんど言及されない。再びフリージアンが、明確に記述史料に登場するのが、6世紀のプロコピオスにおいてなのである。その間、ゲルマン民族の大移動があり、また西ローマ帝国の崩壊があり、ゲルマン諸国家の統廃合があった。しかしフリージアンは、そのような変動の間に、その国家を保持し続け、また、その領土を部分的に拡張し続けていた。7世紀のブリテン島からのアングロ・サクソン修道士の布教活動の時期、そしてその後のフランク王国による併合まで、フリージアンは、独立した部族国家を存続させていたのである。

ところで、古期英語による最古の詩『ウィードシース』にも、フリージアンは言及されている⁽⁷⁾。『ウィードシース』では、フリージアンはジュートとの関連を持つゲルマン人として描かれ、ジュートはユーターン、そしてフリージアンはフレーザンとして言及されている。『ウィードシース』の中で、フリージアン（フレーザン）は、フランクとユーターンと、互いに隣接した地域に居住するゲルマン人として表わされているのが特徴的である。

『ベーオウルフ』では、フリージアンは、『ウィードシース』の場合と同じく、フレーザンとして言及されている。『ベーオウルフ』の中でフリージアン（フレーザン）について述べられているのは、とりわけ「フィン王の挿話」においてである⁽⁸⁾。フレーザンの国王であったフィン王についての挿話の中で、ジュート（エーオタン）とフリージアン（フレーザン）が、同一のゲルマン人であるか、もしくは同じ地域に居住する連合部族のように記述されている。

『ウィードシース』、『ベーオウルフ』のいずれにおいても、フリージアンとジュートは、深い関係を持ち、その居住地域が重なるものとして描かれている。その一方で、フリージアンの、フランクとの関係についても示唆的な記述が見

出される。

以上のように、フリージアンとは、ローマ時代から知られた北海ゲルマン人諸部族の一つであり、また、その居住地域はブリテン島の対岸にあり、古期英語の『ウィードシース』、『ベオオウルフ』においても、重要なゲルマン人として記され、そのいずれにおいても、ジュートとともに、一つの連合王国のような存在として言及されている。それでは、そのフリージアンは、プロコピオスの記述のように、ブリテン島に渡って、その有力な構成民族となっていたのであろうか、それともベータの記述のように、初期のイングランドのゲルマン人諸部族としては、有力な存在ではなかったということになるのであろうか。

ところが、ベータ自身の記述の中に、イングランドの形成についての最初の起源的ゲルマン人の記述とは別の部分に、詳細ではないが、ブリテン島の居住ゲルマン人の起源となる大陸のゲルマン人諸部族が言及されている。そのゲルマン人諸部族から、アングルとサクソンの血統が来ていると述べられていて、その中にフリージアンが言及されている⁽⁹⁾。起源的ゲルマン人諸部族についての二つの記述に関しては、ベータが典拠として用いた資料が複数存在し、後に歴史的事実を示すものとされた最初のゲルマン人諸部族についての記述は、ベータが、当時のイングランドの国家情勢を簡明に略述するために用いた資料によるもので、そこにベータによる資料の取捨選択があり、従ってそれが、必ずしもブリテン島のゲルマン人の最初の移住についての事実を示すものではないとする指摘もある⁽¹⁰⁾。いずれにせよ、二つのベータの記述によって明らかであるのは、少なくともフリージアンについて、たとえアングルおよびサクソンの、大陸の起源的なゲルマン人諸部族の一つとして言及されてはいても、ブリテン島の居住部族であるとは言及されていないということである。しかしながら、ベータより2世紀前のプロコピオスにおいては、フリージアンは、ブリテン島に居住している有力なゲルマン人であった。

そこで、これまで諸々の研究者が、ベータとプロコピオスの記述をどのように捉え、またフリージアンのブリテン島への移住についてどのような見解を提示してきたか、具体的にみることにしたい。

3.

まず英国における20世紀以降の研究史をたどることから始めることにする。20世紀初頭に英国では、ほぼ同じ時期に、ショアーとチャドウィックによる、英国国民の起源についての重要な二つの別個の著作が現われた⁽¹¹⁾。ショアーにも、チャドウィックにも、フリージアンについての言及が見出される。しかしそれぞれの記述には、ニュアンスの上で、かなりの相違があるように思われる。

ショアーから見ることにする。ショアーは、ブリテン島に移住した諸部族を中心に、ゲルマン人について詳細な記述を行っているが、フリージアンについても重要な見解を提示している。まずショアーは、ブリテン島へのゲルマン人諸部族の移動に関して、これまでアングルとサクソンについては、多くのことが書かれているが、フリージアンについては、その移動に与かったことについて、ほとんど語られて来なかったとした上で、フリージアンがその移動に果たした役割が、アングルとサクソンに劣らないほどの豊富な資料によって、証拠付けられるとしている⁽¹²⁾。また、続けてショアーは、フリージアンが、実際はサクソンの名称のもとで、サクソンとともにブリテン島に移住したのであろうと述べている。もっともその見解の根拠は示されていないが、ショアーは次に、プロコピオスの記述に触れる。ショアーは、プロコピオスの記述自体を、具体的に吟味してはいない。しかしながら、ショアーは、プロコピオスの記述を自明の事実とする前提の上でと思われるが、アングルとフリージアンの、北海沿岸からブリテン島への移住は、比較的早い時期に始まっていて、西暦6世紀には、ブリテン島のティー川とフォース川という二つの川の間地域には、その二つのゲルマン人部族の入植地が散在していたとしている⁽¹³⁾。一方、フリージアンの故地である北海沿岸地域の範囲は、今日のドイツの北辺から、デンマーク南端（ユトランド半島）まで広がっていたとし、フリージアンと、その東に居住していたアングルは、他の国から、同じ名前と呼ばれていたか、あるいは両者がいずれもサクソンと呼ばれていた可能性を示唆している⁽¹⁴⁾。ショアーは、プロコピオスの記述についての具体的な論評は避けながらも、それを論述の前提にして、フリージアンがブリテン島に移住したということを、事実として確言するのである。ショアーの見解は、アングルあるいはサクソンという名称の

もとで言及される場合に、そこにフリージアンが確実に含まれているというものである。しかしながら、その場合、なぜプロコピオスの記述で、フリージアンという名称が、アングルとは別個に明言されているかについての説明は見出されない。

20世紀初頭に、ゲルマン人の諸部族について、網羅的で、また極めて斬新な見解を提示したチャドウィックは、フリージアンについても、様々な観点から論じている。まずチャドウィックは、ベーダのゲルマン人の移住についての記述に言及し、それがゲルマン人のブリテン島への移住者達の起源についての、今日まで私達に伝わっている、唯一の確かな包括的な記述であることを確認している⁽¹⁵⁾。一方、チャドウィックは、ベーダ以外に考察の対象になり得る文献として、プロコピオスの記述を挙げている⁽¹⁶⁾。チャドウィックは、プロコピオスの記述について、ベーダよりも2世紀前のものであるという点を強調し、その意味での重要性は認めている。そこにサクソンやジユートが触れられていない点を指摘するが、代わりにフリージアンについての記述があることに言及している。ただチャドウィックは、プロコピオスのフリージアンについての記述が、当該箇所以外の部分で再び見出されないこと、そしてプロコピオス以外の他の文献に、ブリテン島に移住したゲルマン人部族としてのフリージアンについての記述が見出されないことを強調する。チャドウィックは、言語面でのフリージア語と英語との親近関係を指摘するが、ブリテン島への移住者としてのフリージアンについては、それ以上追究しない。残念であるが、チャドウィックのフリージアンについての関心は、もっぱら西暦7～9世紀の大陸のフリージアンに向けられているからである⁽¹⁷⁾。

しかしチャドウィックは、一方で、ゲルマン民族の大移動の時代の大陸におけるフリージアンに関心を示してもいる。そして、一般的に、フリージアンが大移動の時期に移動しなかったとされている点について触れ、フリージアンは、ローマの歴史家達によって記述された、最初のフリージアンの居住地域であったライン川とエムス川の間地域から、大移動の時期に、東方と南方にその居住地域を拡大したとしている⁽¹⁸⁾。また、2世紀以降7世紀まで、フリージアンがローマの歴史家によってほとんど言及されてこなかったのは、フリージアンがサクソンと混同されていた可能性があるためと述べる。そして、海洋の部族

として、4世紀と5世紀に、フリージアンでなくサクソンが言及され、7世紀にはその逆になるということの意味が考慮されるべきであるとしている。

結局チャドウィックは、プロコピオスの記述の重要性を指摘し、またその記述の内容を否定してはいないのであるが、プロコピオスの記述をもとに、あるいはそれを敷衍して、ブリテン島にフリージアンが移住したとは述べていない。

20世紀前半に中世英国史の代表的な通史を著わしたステントンは、プロコピオスの記述の重要性を強調する⁽¹⁹⁾。その理由として、ステントンは、プロコピオスの記述はベダのほぼ200年前のものであり、『アングロ・サクソン年代記』の現存する最古の稿本よりも300年以上も古く、そして、プロコピオス自身は東ローマ帝国のギリシア人であるが、フランク王国の東ローマ帝国への訪問者から正確な情報を得ることができる立場にあり、その知識が正しいものであったからであるとしている。プロコピオスの記述の、アングル、ブリトン、フリージアンについては、ステントンは、まずブリトンが、ブリテン島から今日のフランスのブルターニュとなっているアルモリカ半島に移住することになったケルト人のブリトンであるとし、また、アングルについては、ローマの歴史家達によって言及されているアングリーであるとしている。そしてプロコピオスのフリージアンについて、ステントンは次のように述べている。すなわち、一般的にフリージアンは、ブリテン島への移住に重要な役割を演じなかったと考えられているが、一方でフリージア語は言語的に英語と深い関係にあり、同系統とも考えられ⁽²⁰⁾、プロコピオスに言及されたフリージアンが、大陸のエルベ川下流の西側海岸地域からブリテン島に移住したフリージアンであり、フリージアンはブリテン島で他のゲルマン人諸部族と混交し、後に広くサクソンと呼ばれるようになったのである、と。ステントンが、フリージアンをサクソンと呼ばれていたとする点は、部分的にショアーと、またほぼ全面的にチャドウィックと共通する。しかしながらステントンは、チャドウィックには言及しているが、ショアーには触れていない。

ステントンと同じ20世紀の代表的な英国史家のホジキンは、プロコピオスのアングル、ブリトン、フリージアンの言及について、アングルをアングルおよびサクソンと解釈すれば、フリージアンはジュートということになると述べている⁽²¹⁾。そのような見解について、ホジキンは根拠を示していないので、それ

については推測する他はないが、ホジキンは次のように考えているものと思われる。まずブリトンについては、ウェールズ人のことを示しているであろうことは、6世紀のブリテン島におけるギルダスの記述からも明らかである。そこでアングルとフリージアンについてであるが、ホジキンは、チャドウィックのように、アングルとサクソンが、ブリテン島に移住する以前に、一つの連合部族のようになっていたと考えているので⁽²²⁾、プロコピオスのアングルを、アングルおよびサクソンであるとするのであろうと思われる。一方、フリージアンは、『ベーオウルフ』のフィン王の挿話からも窺えるように、エーオタン（ジュート）と連合国家を形成していたと推測され得る⁽²³⁾。それゆえホジキンは、プロコピオスのフリージアンとは、実際はジュートのことであると考えたのであろう。ホジキンは、ジュートが、その実体についての追求が困難であると指摘し、それを、“Jutish problem”と呼んでいるが、しかしながらその問題に、次のような仮説の提示を試みている⁽²⁴⁾。即ち、ギルダスにおいては、移住者がサクソンの母国から来たと表現されているが（6世紀のウェールズ人の聖職者ギルダスの著では移住してくるすべてのゲルマン人はサクソンと呼ばれている：筆者注）、実際に最初にブリテン島に移住したのは、ジュートであり、そしてその他に、フリージアン、サクソン、アングル、フランクも含まれていたと考えられ、それによってケントにおける様々な墓所の様式が説明される；一方、ケントにおいて、言語の面ではフリージアンとの共通性、法律の面ではフランクとの共通性が見出されることも、そのように考えることによって、説明が可能になる、と。ホジキンは、プロコピオスの、別の文献におけるブリテン島への言及と関連づけて、プロコピオスのフリージアンを含む言及を、そのまま事実とすることはできないとしているが⁽²⁵⁾、プロコピオスのフリージアンを、全面的に否定しているわけではなく、ジュートとの関連で、移住者としてのフリージアンについて、その存在を明言しているのである。

ホジキンの、ブリテン島に移住したゲルマン人を、ジュート、フリージアン、サクソン、アングル、フランクとする考え方は、当時のケント王国を構成するゲルマン人の実体について、示唆するものが含まれていると言えるであろう。ただ、そのことは、それらのゲルマン人が、等しく同じようにケント王国を構成したということは意味しないであろう。ケントにおいて、アングルとサクソ

ンの移住者が多かったとは考えられないからである。一方、ケントでは、フリージアンとフランクは、アングルやサクソンと比して、より多くの移住者がいたものと思われる。前述のように、フリージアンは、『ベーオウルフ』のフィン王の挿話によっても明らかなように、ジュートとの関係が強く、ジュートは、フリージアンの王国領内における友邦国家のような印象を与えるからである。また、ジュートのフランクとの関連については、ケント王国とフランク王国の深い関係が、ベータや『アングロ・サクソン年代記』によっても明らかにされている⁽²⁶⁾。ケント王国の初期の名君であった国王エゼルベルトの王妃は、フランク王国の王族の子女ベルタであり、ローマ法王グレゴリウスの命により、アウグスティヌスを始めとする修道士が、ケント王国をカトリックに改宗する上で、大変重要な役割を演じていた。ベルタのケント王国における改宗における功は、ちょうどフランク王国クロートヴィヒのカトリックへの改宗において、ブルグンドの王女クロティルドが果たした役割に近いものがあると言えるであろう⁽²⁷⁾。

20世紀を代表する英国の考古学者の一人であるマイアーズは、まずベータのゲルマン人諸部族のブリテン島への移住についての記述に触れ、ベータの明快な移住についての記述が、考古学の証拠にも、また、他の有力な文献とも一致しないとする⁽²⁸⁾。そしてマイアーズは、ベータのその移住についての記述の部分を、後にベータ自身が、もとの文章に付加させたものであるとする⁽²⁹⁾。そしてマイアーズは、プロコピオスに触れ、そのプロコピオスのブリテン島に居住する種族の中のフリージアンについての言及を重視する。そして、タキトゥス、プトレマイオスに言及し、サクソンとカウキーの関係について、考古学上の成果をもとに、サクソンがカウキーに取って代わったか、もしくはカウキーを吸収したとする。そしてマイアーズは、ゾイデル海の北と東の内陸の多くの地域に、ブリテン島のアングルの居住地域で出土するのと同じような物が作られていたという点からすれば、フリージアンがブリテン島における居住民族の一つであったとするプロコピオスの考え方は、説得力のあるものであると述べる⁽³⁰⁾。また、マイアーズは、イングランドのアングルは、ユトランド半島のシュレースヴィッヒからの直接の移住者ではなく、また、大陸においてアングルとフリージアンとの結びつきを示す根拠がいくつもあるとしている⁽³¹⁾。そのマイ

アーズの、アングルの移住の経路に関する見解については、筆者は必ずしも首肯され得ないものがあると述べたことがあるが⁽³²⁾、それは、少なくとも文献的には、大陸においては、アングルではなくジュートが、フリージアンと関係が深かったと言えるからである。

ところで、20世紀の前半に、『バーオウルフ』について、ほとんどあらゆる問題点を網羅的に追究した英国のチェインバーズは、とりわけフィン王の挿話との関連で、フリージアンについて論じている。また、大陸のフリージアンの居住範囲についての詳しい言及も行っている⁽³³⁾。しかしながら、不思議であるが、チェインバーズは、フリージアンのブリテン島への移住については、全く触れていない。それは、次に述べる大陸の研究者達の見解と共通しているように思われる。

ここで、大陸の研究者のブリテン島へのフリージアンの移住についての諸見解に触れることにする。

20世紀の前半にゲルマン民族史について大著を著わしたドブシュは、フリージアンについて、何回か触れているが、フリージアンのブリテン島への移住については、完全に否定的な見解を示している⁽³⁴⁾。ベータについてもプロコピオスについても言及せず、社会制度面での研究者の業績の比較検討により、そのような見解を導き出しているのであるが、少なくともプロコピオスについては、その批判的見解の議論に言及が見出されるほうが望ましいであろう。

20世紀最大の中世史家の一人であるアンリ・ピレンヌは、アングロ・サクソンのブリテン島への移住に、大変重要な意義を見出しているが⁽³⁵⁾、その移住者の中のフリージアンについての言及は見出されない。ピレンヌの見解はベータを重視し、プロコピオスの記述については、特に関心を示していない。

ゲルマン民族史の碩学シュヴァルツは、ゲルマン民族の諸部族について、極めて詳細な分析を行ったが、フリージアンを、ブリテン島へ移住した諸部族としては言及していない。シュヴァルツは、ベータの言及に触れ、また、ベータの記述に沿って、アングル、サクソン、ジュートのそれぞれの大陸における故地について、綿密に論じている⁽³⁶⁾。しかしその文脈の中においては、決してフリージアンには言及していない。一方、シュヴァルツは、プロコピオスのブリテン島における居住民族についての記述に言及している⁽³⁷⁾。しかしながら、

シュヴァルツは、プロコピオスの記述の中で、アングルとブリトンには関心を示しているが、なぜかフリージアンには触れていない。シュヴァルツの主たる関心はジユートにあり、ジユートの構成に大変重要な問題が内包されているというシュヴァルツの認識は正しいものと思われるが、シュヴァルツは、そのジユートとフリージアンの関係は追求しない。シュヴァルツの強調するのは、ジユートとフランクの関係だからである⁽³⁸⁾。つまりシュヴァルツは、フリージアンはブリテン島に移住しなかったと考えているのである。

旧東ドイツの研究者の中で、ロイベは、ベーダのブリテン島に移住したゲルマン人についての記述に触れ⁽³⁹⁾、また、プロコピオスの記述にも言及しているが、それについての論評は行っていない⁽⁴⁰⁾。その姿勢は、シュヴァルツに近いものと言えるであろう。一方、コッペは、ブリテン島への移住におけるフリージアンの関与についてプロコピオスの記述に触れ、そして、プロコピオスの報告（記述）だけでなく、北西ドイツやオランダの海岸地域で、フリージアンのその移住に関連する根拠が観察され得ると述べている⁽⁴¹⁾。

総じて大陸の研究者は、フリージアンのブリテン島への移住について、深い関心を示していない。コッペには言及が見られるが、少なくともブリテン島へのゲルマン人の移住において、フリージアンの果たした役割を重要視していないことは、その見解の一般的傾向であると言えるであろう。

次に、英語学者、英語史の研究者についての見解について、少し触れることにしたい。

英国における古期英語の代表的な研究者の一人であるキャンベルは、ベーダの、初期イングランドが三つの部族、アングル、サクソン、ジユートによって構成されているという記述が正当であるということを確認し、それらの部族の大陸の故地に言及して、その人々が、Ingvaeonic West Germans起源であったということをも喚起する⁽⁴²⁾。そしてキャンベルは、プロコピオスの、アングル、ブリトン、フリージアンについての記述を引用し、そのプロコピオスのフリージアンが、Ingvaeonicであることを強調する⁽⁴³⁾。キャンベルは、自身のブリテン島のゲルマン人の故地についての見解は、基本的にステントンに依拠していると述べているが⁽⁴⁴⁾、フリージアンについてのキャンベルの見解は、ステントンの見解とは必ずしも同じではない。キャンベルは、プロコピオスのフリー

ジアン⁴⁵⁾の記述に、深い歴史的事実としての意味を認める点においてはステントンと同じであるが、キャンベルは、そこに特にIngvaeonesの系統の文献的証左を求めているからである。Ingvaeones イングワエオネースとは、タキトゥスやプリニウスに言及されている、北海ゲルマン人諸部族のことであるが⁴⁵⁾、キャンベルは、フリージアン、アングル、サクソン、等のゲルマン人諸部族の、Ingvaenicの系統に、アングロ・サクソンのアイデンティティーを見出しているのである。キャンベルは、とりわけIngvaeonesに強い関心を見出し、その言語的実体について、諸説の検証を試みているが、それについては、別の機会に譲りたい。

米国のクレバーは、その優れた編纂の『ベーオウルフ』の中で、フリージアンについて、何度か言及している⁴⁶⁾。しかし、そのフリージアンは、『ベーオウルフ』もしくは、『ベーオウルフ』の中のフィン王の挿話と関係する古期英語の詩「フィンズブルフの戦」に登場する大陸のフリージアンに限定され、ブリテン島との関連には触れられていない。

その後古典となる英語史を著わした米国の英語学者ポーとケイブルは、ベーダの記述に触れた後、フリージアンは、第四のゲルマン人部族として、ほぼ確実にブリテン島に移住したと述べている⁴⁷⁾。また、フリージアンの故地は、北海沿岸のヴェーザー川からライン川の間地域であったが、フリージアンがブリテン島に移住するまでに、ジュートがヴェーザー川の河口からゾイデル海のあたり、さらにはライン川の下流にまで移動してきていて、フリージアンとサクソンと接触していたとしている。ポーとケイブルは、プロコピオスの記述には言及していないが、後に文献として列挙している諸々の研究者の著をもとに、ブリテン島にフリージアンが移住していたことを事実とし、そのフリージアンが、ジュートあるいはサクソンとともに、ブリテン島に移住したと考えているのである。

英国のキャンベル、米国のポーとケイブルという、英米の代表的な英語史研究者が、それぞれブリテン島におけるフリージアンの存在を重要視していることは、興味深い。ポーとケイブルは、ブリテン島のフリージアンの定住について確言し、またキャンベルは、その著の性質の英語学的側面の制約にもかかわらず、あえてプロコピオスの言及に触れ、ブリテン島におけるフリージアンの

重要性を示唆しているのである。

ところで、イギリスの宗教史に関する極めて優れた著書を著わした英国のゴドフリーは、プロコピオスの記述に触れ、多くのフリージアンが、アングル、サクソン、等とともにブリテン島に渡ったとしている⁽⁴⁸⁾。また、フリージアン語が古期英語に類似していて、7世紀と8世紀のアングロ・サクソン修道士が、大陸のフリージアンに特別の関心を示したのも、そのためであるとしている。また、ゴドフリーは、Wilfredが、フリージアで、すぐに修道活動をする事ができたのも、古期英語とフリージア語がほとんど同じ言語であったからであり、また、ザーレ川の流域のテューリンジアンも同じ言語であったとしている⁽⁴⁹⁾。それは、テューリンジアンにおけるアングルの存在を明らかにするものであろう⁽⁵⁰⁾。ゴドフリーのフリージアンに対する後のアングロ・サクソン修道士の布教活動の部分は、とても示唆に富む内容を含んでいる。

一方、現代イギリスの考古学者のブレアは、ギルダスによるブリテン島の状況についての記述に触れた後、ブリテン島における最初のゲルマン人の王国であるケント王国に言及し、5世紀と6世紀にブリテン島に移住した人々の中にフリージアンが顕著であったことを示す根拠が十分に存在すると述べている⁽⁵¹⁾。ブレアは続けて、フリージアンは、4世紀のローマ帝国時代に、駐屯兵として従事していたと述べ、後の歩兵軍団が、Rudchesterにあったと指摘する⁽⁵²⁾。またブレアは、プロコピオスの記述に触れているが、プロコピオスのその記述の中のフリージアンの重要性については、特に強調していない⁽⁵³⁾。さらにブレアは、ベータのブリテン島へ移住したアングル、サクソン、ジュートについての記述に触れ、その記述がベータの時代において既に人工的な記述であったとする⁽⁵⁴⁾。ベータのその記述は、7世紀および8世紀初頭に存在していた政治的秩序を表わす上では適切な記述かも知れないが、イングランドの諸王国の成立に先行する移動と居住の時代を表わすには、適切な記述とは言えないとしている。そしてブレアは、タキトゥス等の記述に触れ、タキトゥスの時代のアングル、プトレマイオスに言及されているサクソンが、ブリテン島に移住した時に、それらの大陸における諸部族が個別的な単位として特徴付けられる証拠は全くと主張する。その一方で、ブレアは、フリージアンについては、次のように述べている。すなわち、アングル、サクソン、ジュートとともにフリージア

ンがブリテン島に移住したことは確かであり、それは、リンカーンシャーのFriestonや、サフォークのFristonといったような地名によっても明らかである、と⁽⁵⁵⁾。

また、英国の考古学者ロインは、最近の著の中で、ベーダのアングル、サクソン、ジュートのブリテン島への移住の記述に言及した後、アングルの故地に関して、アルフレッド大王によるオロシウスの古期英語訳について触れている⁽⁵⁶⁾。ロインは、ベーダおよびアルフレッド大王の記述を前提的な事実とし、ブリテン島へのゲルマン人諸部族の移住におけるオランダのフリースラントの重要な役割について、言語学者が過小評価していると指摘し、また、考古学者の重視するライン川河口の役割の重要性を強調する。そしてベーダの記述について吟味し、ベーダの記述は単純化されたものではあるが、当時の記述としては、批判されるべき性質のものではない、とする。そしてロインは、ヤンフーンの見解を引用し、少なくともアングルの故地についての記述に関しては、ベーダの記述が完全に正しいと確言している。つまり、最近の考古学の成果により、西暦3世紀および4世紀におけるアンゲルンAngelnの人口は、西暦5世紀には歴然とした減少が見られるので、そこに大規模な人々の移動の事実が見出されるとするのである⁽⁵⁷⁾。その上でロインは、ベーダの記述に対し、現代の時点で考えられる問題点をいくつか挙げている。その一つは、ゲルマン民族の中の諸部族のブリテン島への移住は、ベーダの示したようには、もともと単純化して表わすことができるようなものではないということ、つまり敢えて単純化すればベーダのような表現になるとは言えるかも知れないが、その移住の現象は、もともと単純化できる性質のものではなかったということである。ロインは、また、プロコピオスの記述に言及し、そこに見られるフリージアンについての記述を重要視する⁽⁵⁸⁾。そして、フリージアンのブリテン島への移住について、考古学上、言語上の証拠が存在し、またcommon senseからしても、その居住が明らかであるとする。さらにロインは、フリージアンの故地とその部族を、スカンジナビアの南スウェーデンと関連させて論じている。興味深いのは、ロインの指摘が、20世紀初頭のショアーの見解と重なる部分が多いということである。一方、不思議であるが、ロインは、チャドウィックについては言及してはいても、ショアーについては言及していない。もっともそれは、ロインに

限らないのであるけれども。

以上、フリージアンブリテン島への移住に関して、代表的な研究者の様々な見解を見てきた。ベーダの二つの記述について、そしてプロコピオスの記述について、歴史学、考古学、言語学等の立場から、また、それぞれの国の学問的土壌、伝統に基づいて、フリージアンについての様々な見解が提示されてきたのであるが、それらの見解を踏まえて、フリージアンブリテン島への移住に関する実相について、次の結語で触れてみたい。

4.

フリージアンについて、ベーダとプロコピオスの記述をめぐり、これまで提示されてきた研究者による主な見解を検討してきた。本稿以前に、筆者は、ブリテン島に移住したゲルマン人諸部族として、アングル、サクソン、ジュートの三つの部族について、その故地と移住の軌跡に触れてきたが、本稿のフリージアンは、その三つの部族とは、状況が少し異なっている。まず、これまでの三つの部族は、いずれも、大陸からブリテン島に渡って来たという点が、研究者の間で、ほぼ事実として認識されていた。研究者によって見解の相違はあるが、その相違点は、たとえばそれぞれの部族の故地について、あるいは移動の軌跡について、あるいは、その部族の成立した状況についての見解の相違点であり、その三つのゲルマン人部族がブリテン島に渡ったという点については、諸研究家の見解は、ほぼ一致していた。ところが、フリージアンについては、フリージアンが、実際に大陸からブリテン島に移住したという点が、事実であるか否かについて、研究者の間で、必ずしも見解が一致していない。具体的には、これまでの研究者の諸見解は、次のように分かれている。すなわち、まず、フリージアンのブリテン島への移住を事実として明言する場合、次に、事実として明言はしないが、ニュアンスとしては事実と主張している場合、また、移住しなかったと明言している場合、そして最後に、フリージアンの移住について全く言及していない場合（その場合は、結局移住の事実はなかったとする見解と考へざるを得ないが）、等である。

結局フリージアンは、古代ローマ時代から既に北海沿岸に居住する有力なゲ

ルマン人部族で、ゲルマン民族の大移動を経ても、大規模な部族編成や移動もなく、もともとの北海沿岸地域に居住し続けたが、8世紀にフランク王国に併合され、その後部族と国家とのアイデンティティーは失われる。しかしながら、今日のオランダのフリースラントには、古代以降のゲルマン民族フリージアンの連続性が見出され、またドイツの北東には、中世のフリージアンの移住が、その後も居住地域として存続している。5世紀以降のブリテン島へのフリージアンの移住に関しては、6世紀のプロコピオスによって、有力なゲルマン人部族として記述され、8世紀のベータには、アングルおよびサクソンの起源的ゲルマン人部族の一つという記述もあったが、結局フリージアンは、ベータの、イングランドにおける部族と国家の関係の記述の中で、アングロ・サクソン七王国の構成部族としては言及されずに至ったため、有力な居住部族としてだけでなく、その移住の事実自体も、認定されないようになったのである。実際は、フリージアンは、考古学上の出土品で、その移住や居住の事実が確認され、一方プロコピオスにより、その居住部族としての重要性も明らかにされているのであるが、7世紀と8世紀のアングロ・サクソン修道士の大陸の布教が、フリージアンを一つの拠点として行われたのも、そこがキリスト教化されていなかったことのみならず、理由が求められるのではない。言語的に、部族的にフリージアンとの親近性が、アングロ・サクソン人に感じられていたからこそ、そこに拠点が作られたのであろう⁵⁹⁾。そのフリージアンが、ブリテン島への移住部族、そして有力な居住部族として記述されなかったのは、やはりその部族の本体の移住における関与の度合いが、アングル、サクソン、ジュートに比して、それほど強く切実なものではなかったためであろうと思われる。つまりアングルも、ジュートも、ブリテン島への移住は、ほぼ全部族的なものであり、サクソンにおいても、すくなくとも半数に近い部分が、移住に関与したものと推測される。それに比して、フリージアンは、恐らくは、その居住地域が、ブリテン島に地理的に最も近い地域であったために、移住の行為自体に切実性、重要性を見出さず、また、その移住の際に、部族本体との関係についての決断も、必ずしも伴うものではなく、それ故に、ブリテン島における部族国家成立の希求性も持たなかった。それが結局、ベータによるアングロ・サクソン諸国家の、ゲルマン人部族と国家とのアイデンティティーの記述の際に、その記述から除外され

ることになったものと思われる。しかしながら、実際は、フリージアンは、ケント王国の構成部族としての記述の部分に、ジュートとともに記されて然るべき有力なゲルマン人だったのである⁽⁶⁰⁾。もっとも同じことは、ともにケント王国建国に与ったフランクについても言えることなのであるけれども。

【注】

- (1) Beda (Bede), *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed., Ch. Plummer, Oxford, 1956. 長友栄三郎訳、『ベダ イギリス教会史』、創文社、1971年、第1巻、第15章。
- (2) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, ed. J. Earle and C. Plummer, 2 vols, Oxford University Press, 1892, 1899 ; repr. 1972. 大沢一雄編訳、『アングロ・サクソン年代記研究』、ニューカレントインターナショナル、1991年。
- (3) Procopius, *De bello Vandalico, De Bello Gothico*, etc., ed. and trans. H. B. Dewing, Loeb., 7 vols., London and New York, 1914-40, IV, 9 ; *De bello Gothico*, in *Procopii Caesariensis opera omnia* II, ed. J. Haury, Leipzig, 1963.
- (4) Tacitus (Publius Cornelius Tacitus), *Germania*, 34. *Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938. 泉井久之助訳、『ゲルマーニア』、岩波書店、1979年、34。
- (5) Ptolemaius XI, 7 : Klaudios Ptolemaios, *Claudii Ptolemaei Geographia* ed. Karl Müller and C. T. Fischer, 2 parts. , Paris, 1883-1901. *Geographia*, ed. C. F. A. Nobbe, Leipzig, 1843/1845. 織田武雄監修、中務哲郎訳、『プトレマイオス地理学』、東海大学出版会、1986年。なお、ゲルマン人の名称は、タキトウスにおける名称との関連でラテン語表記にした。
- (6) 拙稿「サクソンとザクセン——中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景について(3)」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第3号、2006年。
- (7) J. P. Krapp and E. v. K. Dobbie, ed., *Widsith*, in *The Exeter Book*, Columbia University Press, 1936, lines 42-44 : lines 61-63.
- (8) Fr. Klaeber, ed., *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, 3rd ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950, lines 42-44.
- (9) Beda, *op. cit.*, V, 9. その箇所は、アングルとサクソンの起源となる大陸のゲルマン人諸部族を列挙したものであるが、フン族も含まれていて必ずし

も正確なものとは言えない。また、フリージアンとサクソンが言及されていて、アングルやジュートは言及されていない。一方、デーンとブルクテリー、リューゲンが触れられている。ある見方からすれば、そこにおけるフリージアンはアングル、デーンはジュート、ブルクテリーはフランクと考えることもできるかも知れないが、その問題の追究は本稿の枠を超えている。

- (10) R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, *Roman Britain and the English Settlements*, 2nd ed., Oxford University Press, 1937, p. 336.
- (11) Th. W. Shore, *Origin of the Anglo-Saxon Race*, Kennikat Press, Port Washington, N. Y., London, 1906 : repr. 1971. H. M. Chadwick, *The Origin of the English Nation*, Cambridge University Press, 1907.
- (12) Shore, *ibid.*, p. 67.
- (13) *ibid.*, p. 68.
- (14) *ibid.*, p. 69.
- (15) Chadwick, *op. cit.*, p. 54.
- (16) *ibid.*, p. 55.
- (17) *ibid.*, p. 93.
- (18) *ibid.*, p. 96.
- (19) F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England*, 2nd ed., Oxford University Press, 1947, pp. 5 – 6.
- (20) Cf. Chadwick, *op. cit.*, pp. 61 – 64.
- (21) R. H. Hodgkin, *A History of the Anglo-Saxons*, vol.1, Oxford, 1935, p. 82. Cf. E. Wadstein, *On the Origin of the English*, Uppsala, 1927.
- (22) Hodgkin, *op. cit.*, p. 82.
- (23) Klaeber, ed., *op. cit.*, lines 1071 – 1159.
- (24) Hodgkin, *op. cit.*, p. 111.
- (25) *ibid.*, p. 82.
- (26) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, ed. J. Earle and C. Plummer, vol. 1, Oxford University Press, 1892 : repr. 1952, p. 21 (Laud MS.)
- (27) Gregorius de Tours, *Gregori Episcopi Turonensis historiarum libri X*, in *MGH, SS rerum Merov.*, Tom. 1, ed., Wilhelm Arndt, Hannover, 1885, II, 30 – 31. Die lateinisch – deutsch Ausgabe von R. Buchner, 1959. 邦訳 :

- 『トゥールのグレゴリウス 歴史十卷（フランク史）I』、兼岩正夫、臺幸夫訳註、東海大学出版会、1975年。
- (28) R. G. Collingwood and J. N. L. Myres, *op. cit.*, p. 336.
- (29) *ibid.*, p. 337.
- (30) *ibid.*, p. 341.
- (31) *ibid.*, p. 344
- (32) 拙稿「アングルの故地とその移動の軌跡について——中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景について（4）」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第4号、2007年。
- (33) R. W. Chambers, *Beowulf— an Introduction to the Study of the Poem*, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959, pp. 245 – 289.
- (34) A. Dopsch, *Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung, aus der Zeit von Caesar bis auf Karl den Grossen*, zweite, veränderte und erweiterte Auflage, Wien, 1923–24. アルフォンス・ドブシュ著、野崎直治、石川操、中村宏訳、『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎——カエサルからカール大帝にいたる時代の——』、創文社、1980年、302–308頁、特に305頁。
- (35) H. Pirenne, *Histoire de l'Europe des Invasions au X^{VI}e siècle*, Paris et Bruxelles, 1936. 邦訳：アンリ・ピレンヌ著、佐々木克巳訳、『ヨーロッパの歴史』、創文社、1991年、204–205頁。H. Pirenne, *Mahomet et Charlemagne*, Paris et Bruxelles, 1937. 邦訳：アンリ・ピレンヌ著、増田四郎監修、中村宏、佐々木克巳訳、『ヨーロッパ世界の誕生』、創文社、1960年、p. 197。
- (36) E. Schwarz, *Germanische Stammeskunde*, Carl Winter · Universitätsverlag, Heidelberg, 1956, pp. 123 – 124.
- (37) *ibid.*, p. 123.
- (38) *ibid.*, p. 124.
- (39) A. Leube, *Die Germanen*, hrsg. von J. Herrman, Band II, 2 durchgesehene Auflage, Akademie – Verlag, Berlin, 1986, p. 476.
- (40) *ibid.*, p. 476 ; fn.138.
- (41) *ibid.*, p. 477.
- (42) A. Campbell, *An Old English Grammar*, Oxford University Press, 1959, p. 3.

- (43) *ibid.*, p. 3, fn. 6.
- (44) *ibid.*, p. 3, fn. 5.
- (45) Cf. Chadwick, *op. cit.*, pp. 295 – 296.
- (46) Klaeber, ed., *op. cit.*, Introduction. p. 233, fn. 3.
- (47) A. C. Baugh & T. Cable, *A History of the English Language*, 3rd ed., Routledge & Kegan Paul plc, London, 1978, p. 47.
- (48) J. Godfrey, *The Church in Anglo-Saxon England*, Cambridge University Press, 1962, p. 60.
- (49) *ibid.*, p. 250.
- (50) *ibid.*, p. 230.
- (51) P. H. Blair, *Roman Britain and Early England 55 B.C. – A.D. 871*, Thomas Nelson and Sons Ltd, Edinburgh, 1963, p. 161.
- (52) *ibid.*, p. 162.
- (53) *ibid.*, p. 164.
- (54) *ibid.*, pp. 168 – 169.
- (55) *ibid.*, p. 170.
- (56) H. R. Loyn, *Anglo-Saxon England and the Norman Conquest*, 2nd edition, London and New York, Longman, 1991, p. 24.
- (57) *ibid.*, p. 25.
- (58) *ibid.*, p. 28.
- (59) Godfrey, *op. cit.*, p. 82.
- (60) Baugh & Cable, *op. cit.*, p. 47.